

2018 年 10 月 8 日 東京都美講堂 14-16 時

## 中村正義 (1924-1977 享年 52 歳) とわたし (1931-)

## ●私の日本画コレクション

## 日本画との出会い

戦中期に祖父に導かれ日本画に興味を持つ。それは父が出征し、母が店を切り盛り、祖父母の面倒を見ていた。当時の冠婚葬祭は自宅で行うのが通例で、床の間に掛け軸を飾り、座敷に並ぶタンスの前に屏風を巡らすのが、小学校高学年のわたしの役割だった。薄暗い蔵の中で、多分行商から求めた作品を、自分の眼で選別して運び、祖父に見せると、図柄の不向きや、季節感やいろいろいわれて蔵に戻り、差し替えるのが辛かった。そんな中でも、季節に合ったきれいで見事な作品に出会うとうれしかった。戦後に、祖父や父がなくなり 50 年ぶりに、蔵に放置され絵画を点検したら絹本はボロボロと崩れ、全てが壊滅的な状態であった。

当時の日本画の生活に密着した役割に気が付かされた私はそんなことが、頭にあって、いつしか日本画に接し、身丈にあった作品に出会うと購入し、身辺に飾り、楽しむようになった。

最初の購入は、1962 年に日展系の日本画家浜田台児 (1916.11.15—2010.9.1・93 歳没・《黄風》で日展初入選、《黄流》で特選) の《冠鶴》であった。三溪洞の第 1 回白水回出品作で、私が 32 歳のおりで、50 年以上も前の話です。第 2 作目は、院展系の日本画家片岡球子 (1905.1.5・2008.1.16・103 歳) の《冬の富士》1965 年、であった。それは、その購入の前年まで私が静岡の、今の県立美術館の近くに、3 年ほど住み、毎日富士を正面に見ていたことと関係があると思っています。35 歳頃の話です。

## 中村正義の作品と出会う

中村正義は (1924.5.13-1977.4.16・52 歳没) で、1924 年に 1 男 7 女の末っ子に生まれる。1937 年 4 月豊橋市立商業入学するが、1940.9.4 肺の病が悪化して中退し、進学を諦め、1946. 8 月頃、中村岳陵の蒼野社に入門、その年から日展に出品を続ける。1946 年 第 2 回日展 (10 月) に《斜陽》初入選 22 歳の時である 1947.9 月、院展に《爽涼》出品、初入選。1950 年 10 月第 6 回日展で《谿泉》初特選 26 歳。

1952年に第8回日展に《女人》出品再特選。1960年第3回日展に審査員として《太郎と花子》出品 日展会員となる36歳。3月一采社解散。1961年正義日展を脱退。

正義のライバルでもあった青龍社の横山操(1920.1.25-1973.4.1・53歳)は、正義の4歳年上で、正義とほぼ同じ足跡をたどり1962年の8月に青龍社を脱退する。

私は当時日本画では、中村と横山に注目していましたが、中村の絵画の値段は私の当時の収入を遥かに超え、横山は会場芸術主義を標榜し私が好んだ作品は大作主義を標榜した大作で個人の手には負えませんでした。

それに比して、星野真吾(1923.8.15-1997.12.29・74歳)や三上誠(1919.8.7-1972.1.16・52歳)は、羽黒洞にゆけば、未だ価格も安く私の予算で求められたのが実情でした。

2003年7月(71歳)に、私のコレクション展が美術館で開催されましたが、その折に正義のお嬢さんが展覧会をご覧になり、何故、星野真吾さんや三上誠さんがあるのに中村正義が無いのとの話になり、私は欲しかったが値段が高く手を出せなかったので版画を買って我慢してましたが、美術館の企画者は、版画を選ばなかったので展示できなかつたと説明しました。

当時正義は、日展の花形作家として、その実力も高く評価されおり値段も格別でした。今では懐かしい思い出です。

そのコレクションの展覧会のあと、私は縁があって、正義の《男》1954《建築中の家》1957《森の道》1958《樹》1960《二人》1960《花》1963《舞妓》1966《月》1969《顔》1970《顔と顔》1976など買い求めました。

現在川崎の麻生区にある中村正義の美術館が臨時休館中ですので、私の家にある正義の作品の全てを、玄関から面談室まで正義の小品の顔を中心に意識して展示しています。来客は個性的な顔の作品を一見して正義と解かるようで、こちらが驚いているところです。

## ●中村正義との出会い

正義は1924年の生まれ、私は1931年で、正義は私の7歳年上です。ですから正義の生誕100年は、5・6年後で間もなくやってきます。

わたしと、正義との最初の出会いは、人人展スタート(1974.6.11)の直前で、そして羽黒洞でした。

当時上野は美術展のメッカでした。その上野の山の直近の湯島に羽黒洞があります。ために羽黒洞は、作家や美術団体のたまり場でもありました。羽黒洞の主人は、懐に常に万束を持っていたきっぷの良い木村東介です。私と田舎も一緒に、実は木村東介さんは、私の父とは旧制の商業学校時代の同級生でした。私の娘の結婚式にも直前になって、席割りも決定しているのに、介添人との二人の出席を考慮するよう乱暴な申し入れをして困らせられた記憶がありません。

羽黒洞は、会議室も用意でき、待ち合わせ場所にも適当なところから、美術団体や作家個人から、借入申込が多く毎日賑わっていました。

羽黒洞は当時 1 年無休で営業してましたから会社が休みの日は、私は百貨店か美術館。羽黒洞でした。そんな関係で羽黒洞出入りの作家ともいつしか面識を得るようになります。

羽黒洞には、私好みの作家の、中村正義・山下菊二・星野真吾・斉藤真一・佐熊桂一郎らが入り込んでいましたので、しばしば顔を合わせ、挨拶を交わすようになります。評論家では、針生一郎です。東介さんが針生の既存画壇に対する痛烈な美術批評に感動し、彼を呼んで宴席を持ったのが最初です。中村正義とは、針生も、私も、東介さんを通して知り合いました。

私は当時都市銀行に務め、上野支店におりました。東京都美術館の日展・院展・など各美術団体とも取引もあり、関係者とお互い顔馴染みでした。菱田春草の長男の菱田春夫さんは日本美術院の理事で、事務局長でもありましたので、来店の節はお話をしました。1987年1月14日84歳、心不全で亡くなりました。思い出です。。

## ●正義作品の一貫性の欠如について

正義没後の1980年に、神奈川県立近代美術館で、豊橋美術博物館と共催で「中村正義展」が企画されたますが、館長の土方定一の反対で一時挫折します。その後、同館で中村正義展が実現するのが、土方館長没後の1983年になってのことです。

土方定一の反対の理由を、展覧会の仲立ちした針生一郎は、当時自宅療養中だった土方に、展覧会の作品写真を集めて届けた所、土方に「正義の作品に一貫

性や持続性が見られず、会場が持たない」と言われ、土方のオーソドックスな判断に反論ができず引き下がったと語る。

一般的に画家はそれぞれ独自のスタイル作り、それを深化させて画風を作る、山本丘人風・高山辰雄風などはそれを指す。正義の場合は、対照的に自己改革の過程で新しい自己を発見して表現するタイプで、外面的には絶えず自己変革を遂げた作家ですが、内面的には、強固なほどに一貫性を保持した作家です。正義の風景・静物・舞妓・顔などに一貫して背後に正義が潜んでいます。見方によっては、正義の作品の全てが自画像だとも考えることができます。見事な一貫性です。土方も針生も絵の一面(表面のみ)を見えています。

ご承知のように、絵に厚みのない、内面のない、表面だけの絵は、見る人に共感や感動を与えることが出来ません。きれい、うまいだけの絵になります。藤田の戦争画なども表面だけで早呑込みをして最高の傑作た、反戦画だのと評価する。

## ●中村正義の足跡

### ●1963年(正義 39 歳)

針生一郎は夫妻と娘さんと矢野さんに分けていただいた犬を連れて、この年の春、朝日ジャーナル編集部の矢野純一に誘われて、初めて中村正義宅を訪問します。その更に矢野も親犬を連れていた。正義はかねてから矢野に対して日本画研究会の開催の協力を依頼しており、矢野の仲立ちで針生と正義の三人は、これについて話し合い、これまでの日本画の概念に飽き足らない仲間を集めて、毎月定例の研究会をはじめることとなります。正義が洋画家の山下菊二と出会うのもこの研究会でした。正義は当時狭い交際で、日展の仲間しか知りませんでしたから、この研究会を通して画壇変革を希求する仲間の面識を得て、活動の輪を広くしようとしていたのは間違いないと思います。

### ●1966年 (正義 42 歳)

1月、夕刊誌『うへの』に正義かかわり表紙絵を連載する/1月、ヨーロッパ・アメリカを旅行 / 日本画廊開廊・第1回展 1月11日—29日・(1階)木内克展(2階)井上長三郎展/ 5月16日・6月11日・中村正義個展『顔の自伝』・6月27日—7月16日針生一郎選『これが日本画だ展』大森運夫・片岡球子・中村正義・星野真吾ら25名、評判となる) / 8月第1回戦争展(中村正義《男と女》出品)。この年の4月川端龍子が逝去し青龍社解散。

### ●1967年(正義 43 歳)

3月東京医科歯科大学附属病院で直腸癌手術、人工肛門となる8月に退院

### ●1969年(正義 45歳)

日展脱退以来、阻害されていた画壇への復帰を果たすべく綿密な計画で銀座三越で個展開催《太陽と月のシリーズ》35点を出品、初日に完売した。

### ●1971年(正義 47歳)

篠原一男設計の正義邸「直方体の森」完成・八重洲一丁目ビルの計画を推進。

### ●1972年(正義 48歳)

1月16日、三上誠、肺結核が再発し、人人会の発足を目前に、福井市で**急逝する。享年52歳。**

### ●1973年(正義 49歳)

3月、正義の八重洲一丁目ビル完成。ビルの活用構想・建設資金の捻出、美術の新潮流への野望。

10月19日、中村正義とその仲間たちがこの日集まり、新しいグループの立ち上げについて話し合い、グループ名を、人を横に並べた各人一人一人れが核になる横並びの会を表す人人の造語で会をと、佐熊桂一郎の提案し、読みは正義がひとひとと読み「**人人会**」とすることに決定した。**事実上の発会日**

**ある。**正義は発会に際して3つの約束を提起する。1.団体に権力を持ち込まない。2.団体内に差別状況を作らない。3.権力に対して表現の自由を守る の3つである。同時にこれらが運動として外部変革と原動力の母体となることを使命とすると明示した。

実は正義は、三上の病状悪化もあって、会の立ち上げ以前に第1回の展覧会を開催すべく駆け回り努力していたが。東京都美術館の借館は「使用実績がない」と退けられていた。この1件は、後の「東京展」の立ち上げ運動の発端となる。

「第1回人人展」の三越本店の会場確保は、1969年の銀座店での正義の個展担当の**中村敏子(鈴木)**さんと、当時の銀座店長であった岡田社長の正義への肝いり

であった。

また正義はこの1回展に、旧体制、日展・院展系作家との競合展を目論んだが、意図が相手に伝わり、開催はされたが 実際には、正義らとの同時開催を嫌った旧体制の大物の展覧会には出品者の辞意が広まり作品が集まらず、実質上の閉会状態となっていた。

### ●1974年(正義 50 歳)

1月、三上誠の追悼画集(三彩社)完成。

6月11日・16日、第1回「黒い太陽と・7人の画家一人展」が三越本店の催事場で開催された。中村正義・大島哲以・佐熊桂一郎・斉藤真一・田島征三・星野真吾・山下菊二が出品、ほかに、開催に間に合わなかった三上誠の遺作が特別陳列された。

会場正面の右の入口第1室に正義の作品が並んだ。その入口に腕を組んで正義が立ち。面識のある観覧者と挨拶を交わしていた。私がそっと近づき「とうとう舞妓から抜け出しましたね」と挨拶すると大きく頷いていたのが記憶に残る。その作品は《うしろの人(旧題舞妓)》である。

### ●1975年(正義 51 歳)

この年の年初、私(笹木)は、正義に呼び出され融資の相談を受ける。

彼は無心で東京展の立ち上げのために私財の全てを提供し、ひっぱっているのに、金も出さず口先だけで、私が団体を私物化していると批判している輩がいるので、東京展に直接融資していただくための手立てを教えてほしいというものであった。まず東京展の定款に融資を受ける際の規定があることが前提で。今の段階で東京展には資産がなく、どこの金融機関でも直接融資は難しいこと。中村正義や幹部の連帯保証なしでは無理とお答えした記憶がある。

このあと何回か相談を受けたが、正義の病状が進んで伊豆の保養から帰ったらと言う段階で体調が危機的な状態となり話が中断した。

2月、正義は「第2回人人展」を東京都美術館で開催すべく作品制作そっちのけで、羽黒洞と日本橋の自社ビルを使い作戦会議を重ね、駆け回っていた。自分に残された時間は、ついその先に近づいていた。自覚もあり、東京医科歯科大学に入院診察を受けた結果、精密検査を指示されたのを拒み、日本医科大学の附属病院の丸山ワクチンを選んでいる。

2月、都の美術館だから都民に美術館を開放しろと「東京展市民会議」が発足。閉鎖的で独善的な管理・運営を都民の手に取り戻すのには、二度どない絶好の機会であった。それは都美術館が新装完成し、運営の見直しもテーブルにのぼ

ついでに都知事選挙で革新派が勝利し美濃部都政となっていた。正義はこの機を逃さず、正義は事務局長として、実現のために自分の病氣も顧みず駆け回った。遺された正義の手帳を見ると、美濃部を支持した与党の社会党・公明党を日参し、趣旨説明と理解・協力を求めて奔走していた。日本橋の新築の正義ビルの上階は東京展の会議室化していた。美濃部都知事の選挙参謀であった法政大学総長の中村哲は議長として初期東京展を支えている。

11月1日・20日、念願の東京都美術館で「第1回東京展」を開催。日展の会期と重なっており正義が望んだ日展と競合する展覧会となった。東京展会場催事の各団体にも中村正義は費用を提供した、会場入口では、岡本太郎の人形が挨拶をしていた(この人形は現在岡本太郎美術館に展示されている)。体力の限界と戦いながら正義は《おそれ・B》を出品。東京展は人気を博し大成功裡に閉会した。

### ●1976年(正義 52歳)

1月30日・3月28日「日本画の叙情・雪月花展」山種美術館開催《山々》出品。

1月末に羽黒洞の木村東介呼び出されたのは針生一郎は、東介から「まだ本人にも、誰にも知らせていないが、医者診断によると中村の病氣は癌で、それもあと半年も持たないと言うんだ」と正義の余命を告げられる。

3月6日・28日、「三上誠展」神奈川県立美術館、中村正義は展覧会の費用の半分を美術館と分担し、図録に寄稿し、展覧会の委員長を務める。この展覧会は三上誠を世に残すため、逝去を聞いて枕元に駆けつけた正義が、100点を超す遺作の買い取りと、画集の刊行と、展覧会の開催という、三上誠の弟と約束した三つの約束の一つを実行したものである。三上誠の画集は1974年3月に、三彩社から出版し、全点買い取り、画集の全費用を正義が負担支払っている。作品は、正義の没後に開館した福井県立美術館に譲渡(一部寄贈)したのはあや夫人である。残りは中村家が所有している。全ての三上との約束の完済は、正義自身の死の前年のことであった。

3月9日・21日「第2回人人展」東京都美術館で開催。正義は《ピエロ》ほか出品。

6月1日・10日「中村正義展」横浜市民ギャラリー《風景画》1960年代20点/《顔・人物画》1960-1976・150点 正義は死を前に覚悟を決めての企画で、観覧者への惜別のあったが、自身が動けず入場者数が伸びなかった、

6月3日・20日「現代日本美術展」サンパウロ美術館《ばら》出品

9月21日・10月8日「第2回東京展」東京都美術館《人間》《舞妓》書《ほら》出品

### ●1977年

4月16日、肺がんによる呼吸不全のため川崎市の聖マリアンナ医科大学付属病院で死去(享年52歳)。

最後に・正義は日本橋の新築ビルの売上金の一切を「東京展」に注ぎ込み、借り入れの建設資金は、そっくり遺族に遺された。返済の引き伸ばしの、利払いだけは律儀にも、その日が来ると仏画を準備し支払金に当てていた。

## ●別れの言葉

「別れの言葉—人人展・人人会に」(東京展にも重なる言葉である)

創作活動というものは、個々の人間が個人個人、それぞれの立場と考え方で行うものである。その際、それぞれの発想がちがっていることに、より多くの意味がある。

しかし、だからといってグループを形成して活動することに、意味がないということではない。グループを形成する個々の人の連帯を持って状況に働きかけることは、有意義であるし必要である、もっと言えば、働きかけるべきであるし、働きかけなければならない。

私はずっと以前から、個人の創作活動と同時に、それと並んでグループ活動というものを、理想的な活動の場所の一つとして考えてきた。では個々の人の連帯に支えられたグループというものがどうして大切なのか、何故必要なのか。いうまでもないことだが、個々人がそれぞれの発想に基づいて、独自の創作活動をするには、その活動の自由が欠くべからざる前提である。ところが現実には、その自由を阻害し、拘束し歪曲する社会制度習慣などの悪が存在している。自由な創作活動を求めるものは、自由を抑圧するこの社会悪に対して闘い、自由を取り戻す状況に働きかけなければならない。

状況と戦うには、個々人一人ひとりにおける闘いの意思と実践が問われることはもち論であるが、それだけでは十分ではない。自由を取り戻そうとする個々人相互の連帯の力・・・グループとしての発言と行動・・・が要求されるだろう。創作活動にとって自由は、あたかも酸素のごときもので、自由なくして創作はありえない。個々人の活動と個々の連帯するグループ活動・・・この両者の活動を相携えて、創作の自由を実現してゆくのであろう。



いま私が関心を持っているのは・・・個々の人間の創作活動に意味があると前提して、その意味は、当の人間が消滅したあとどうなるのか、意味を持ち続けるのかということである。生きている時に意味のある作品を残した人間の意思というか、理念というか、具体的にはその人の発言や行動や作品は、死後になってもその意味が、いたずらに抹殺されたり、密閉されたりしてはいけない。むしろ、より積極的に状況に対応し、状況を変えて行くために発表されることが願わしい。私の中にあるこうした思いや願いは決してわたしひとりものではあるまい。それは創作活動に携わった人間の共通の思念であり、祈願ではなかろうか。こうした思い、願いに、グループ連帯の根幹を据え、その実現にグループ活動の重要な意味の一つをもたせたいと考えているがどうだろう。

グループとその活動に対しては、一般的な通念なり、常識といったものがある、ある種のイメージや観念が抱かれていること、このことを私はよくよく承知している。しかし、私達のグループは、これらを強烈に撥ね退けて状況に立ち向かい戦わねばならない。グループは、個々の作家の生存中はもちろん死後に至ってなお、その意味を意味あらしめるために、相互の連帯を持って推薦し、推奨するそうすることによって、作家の理念・思想・行動の持っている意味が、状況の中でより具体化する。個々の作家のプロのプロたる所以、プロフェッショナルの作家の意義は、このようにして真に現実実現され、検証されるのである。自由な創作活動を希求する個々の作家と、その連帯に支えられたグループ活動。そのイメージを語ってみた。それは人人展ないし人人会に対する僕の一つの期待でもある。